

設問 1

ケージの無音の音楽やデュシャンの便器の芸術は、音楽や芸術とは何かを問う、新しい思考の創造だった。そうした芸術家を通して、ひとり一人があらゆる価値観をさし出すことのできる社会が目指されるのである。便器の作品にはもやもやを感じるが、その解消のために、鍛錬された技術の上に成り立つ「芸術」と、発想や考え方に重点をおく「アート」とが使い分けられた。これにより芸術は歴史の重圧や権威と閉塞感から解放された。だが、そもそも芸術やアートのはじまりは、想像力によって目に見える世界の向こう側にある世界を見、聴き、語ろうとする願望を持った人類の起源にある。人間は、目の前にある現実を受け入れるだけでは、その生に満足しない。そうした人間の持つて生まれた本質的な欠落感を埋める手掛かりである芸術こそが、人間を人間たらしめるのである。

設問 2

【解答例 1】

人間の創造性は、ありふれたものを見知らぬオブジェに変えてみせることから始まる。現代アーティストの AKI INOMATA の作品に、大きさも様々な棒が直立しているインスタレーションがある。それぞれの棒は微妙に傾いているような、奇妙にえぐれたフォルムをしている。作者の解説によれば、それは動物園のビーバーが齧った角材なのだ。動物が本能のままに、齧りやすい材質部分を齧った結果である。それだけのものを、作者は直立させ、「アート」として括って提示した。これは動物と人間とのコラボレーションだ。「人間」の作者性が後方へと退き、芸術と非芸術との境界線が揺らぐ。歴史からも権威からも自由な空間で、作品それ自体の物性が際立ってくる。鑑賞者は何かもやもやしなながらも想像力を働かせていく。フォルムのおかしさに笑いそうにもなれば、それが失われた命の墓のようにも思える。ただの棒切れを別の何かに見せる点に、人間の創造性の面白さがある。

【解答例 2】

緻密で再現性の高い人物画で知られる諏訪敦は、しばしば会えない、見えない存在である死者を題材に選ぶ。『HARBIN 1945 WINTER』は、戦後まもなく満州の難民収容所で病死した自身の祖母を描いた作品だ。雪原に打ち捨てられた遺体はチフスによる下痢と嘔吐でやせ衰え、無数の発疹が浮かんでいる。亡父の手記から作品の着想を得た諏訪は、まず健康な祖母の身体を描き、病徴を加えて何度も描き直すことで、最後の形に仕上げたと言う。人を描くということは、単に外見を写し取ることではない。諏訪は手のかかるやり方で祖母の人生と死にゆく時間、家族の記憶の共有をめざした。それは画家が鍛錬してきた技術と、自身の生の背後に連なる死者たちに出会いたいという思いによって実現した、七十年ぶりの手厚い弔いである。人間の創造性はこうした個人的に切実な願望によって発揮されるものであり、だからこそ、その結晶が見る者の関心と共感を喚起するのだろう。

## 【解答例3】

芸術と非芸術の境界が無効化しつつある状況を私は幼少期から無意識のうちに体験してきた。越後妻有の大地の芸術祭に私はたびたび「参加」し、その広大な開催地のあちこちのアート作品を巡った。すると次第にここにある田畑も古民家も、拠点である松代の里山食堂もその駐車場も、何もかもがアートに思えてきて、ワクワクしながら何日も過ごした私は、日常に戻ってからも、生活環境をそれまでと違う目で捉えようとしていた。

当時の私は何もわからずにただアートを楽しんでいただけだが、今ではこうした芸術祭の意図を理解できる。情報が溢れる現代を生きる大人たちは、芸術を伝統や権威と結びつける様々な言説に染まっている。芸術祭はそこから大人たちを解放し、子どもたちのように誰もが持つ人間の創造性をゆるやかに回復する場や機会を提供しているのだろう。人間の創造性とは「発見 II Discover」する力、つまり覆いを取り除く能力のことなのだ。

## 【解答例4】

現代人の生活環境は人工音に溢れている。スマホの着信音、駅の発車メロディ、夕方五時の地域放送。初めて聴いた時、それらも素敵な音だったのかもしれない。だが今や陳腐化したそれらは一定の身体的反応を呼び覚ますだけで、音(楽)としての賞味期限を遥かに超えている。だから私たちは無意識裡にそれらを積極的に聴かないようにしている。

こうした音環境に居るせい、傘にポツポツ当たる雨などの自然音が私の耳にも心地よく響くことがある。自然音はただ在るだけで、私たちに何らかの反応を強いる訳でも、聴くことを求める訳でもない。自然音から人工音を作り音楽に昇華させた歴史が世界の向こう側を聴こうとする人間の創造性に根ざしたものだとしても、それが過剰になれば自然音に回帰したくなるのもまた人間の性だろう。ケージの「4分33秒」は過剰な人工音からの逃亡という意味で、現代人に顕著なこの傾向を先取りしていたのかもしれない。